

### ● ニュータウンの戦略的再生

戦後、大都市圏への人口・産業の集中を背景に、郊外に大規模住宅地、いわゆるニュータウンが開発され、高度成長を支えた団塊の世代を中心とする企業戦士の定住が進んだ。今、その人々の多くが後期高齢者への仲間入りを前に、高齢化、単身化の荒波の中で、先行きのありようを模索し、あえいでいるという。こうしたなか、三好庸隆武庫川女子大学教授が7月8日の日経新聞朝刊に表記のタイトルの「私見卓見」を投稿している。その骨子は、かつてのニュータウンはいまや住民の高齢化・単身化が進み、課題先進地の様相を呈しているが、例えば、自動運転を導入して移動・買い物困難の解消につなげたり、遠隔医療で在宅介護をしやすくしたりするロボットや人工知能（AI）技術を導入・活用し、また、働き方改革や女性活躍、グローバリゼーション等の社会課題への対応等を図るため、年齢や職業など住民の同質性が高く、組織化された住民自治会があるといった特長や道路や公園のインフラが充実している特性を生かして、暮らしに密着したビジネスやサービスの新しい展開の拠点としてその再生に戦略的・先導的な役割を果たすべきだという主張である。その際、進行するスラム化した老朽化マンションのリフォームへの対応や地域に広がる空き地等の再生への対応も無視できない課題であろう。こうした動きを産官学民が連携して早期に具体化・加速することで、ともすれば介護される側の年金生活者としてマイナスの位置づけを与えられている後期高齢者が、新しい職・住の好循環の創生に前向きにかかわる担い手として、様々なプロジェクトが次々と動き出すことが強く期待される。